日本の歴史の始まり

日本の歴史は、どの辺から始まったのか。はっきりいって、出雲のスサノウから、始まったと、言えると思う。それは、水の湧き出る盆地や川の傍に人が住む集落ができて、そこに村長のような支配者が居ると言った形で、全国に大小何千と存在したと思われる。その点を次々に東ねて、面にした最初は、出雲から始まり、その開拓者がスサノウである。

スサノウは、西暦 122 頃生まれている。生まれた所は出雲国沼田郷で、現在の島根県平田町平田である。この沼田郷は、古い書物に「黹多」と言う字を使ってあり、宍道湖に注ぐ斐伊川の西側に「濱う」と書いてあるから、堤防の出来ない以前は、川幅があの辺まで広かつたのであろう。ここで兵糧に使う乾飯を作つた、と言う記録がのこっている。

スサノウの父の名はフツ(布都)といつた。フツというのは蒙古、満洲系の名前で、スサノウの本名は(布都斯)で素佐之男は通称だった。現在平田市の平田には、スサノウが生まれた所として、「宇美神社」が、残っている。宇美というのは、子供を産むと言う意味で、昔は有名人の生まれた所に祀るのは、みんな宇美神社といった。

神功皇后が三韓征伐から、帰って来て、福岡県粕屋郡蚊田郷で応神天皇を生んだ。そこに神 功皇后を祀つてあるのも宇美神社で(福岡県)、現在その社名をとつて、ここを宇美町とい つている。出雲の宇美神社には、スサノウの父親の(布都御魂)が祀られている。

他にも、(布都御魂)で祀られている、神社が、奈良県天理市に石上神宮が有る。10 代崇神 天皇が時の大臣伊香色雄に命じて創建された神社で、親から孫まで4 代祀られている。

木次事件

スサノウが 20 歳の頃(142 年頃)現在の島根県大原郡木次町に住んでいた当時、出雲第一の豪族と思われるヤマタノオロチ(八岐大蛇)との事件が起こった。昔の出雲地方から「熊鰐」とか「荒海」とかの人名が見つかったが、こういう相手を威喝するような名前が当時流行していたものと見える。このヤマタノオロチはその東の大東町清田に、鉄の鉱山、製鉄所(当時、出雲地方では鉄文化が盛んだつた)を持つ大富豪でも、あつたらしい。

この清田には、鉱山に必ず祀る「金山彦」を祀った西利太神社(清田の地名も昔は西利太といつた)が現在のこっている。出雲風土記には「世理陀社」とある神社である。

そして、ここから斐伊川に注ぐ支流を、鉄の錆で川が赤かつたと伝えられて、今でも「赤川」という。豪族で金持ちであれば、必ず美女集めることは、古今東西、男性である限り変わりはない。この八岐大蛇も出雲地方で評判になった美女を次々と自分の手元に集めたらしい。その中に、(稲田姫)がいた。この稲田姫の生地は何処か調べたら、やはり斐伊川の上流の仁多郡横田町のようである。ここに、稲田姫を祀った稲田神社があり、「稲田」という地名もあり、稲田姫産湯の池と称する池もある。

スサノウが、この娘を好きだったのか、それとも、権力者に対する青年の単純な正義感であったのかは、不明だがこの稲田姫が、木次に連れていかれたとき、恐らく夜襲をかけたもの

であろう。木次にあるヤマタノオロチの館に切り込んで、オロチを倒し、稲田姫を奪いだした。当時、一番長い刀で「布都御魂」の剣で国宝になっている。

このヤマタノオロチの切られた館の跡に、八本の杉を植えたという記録があるが、この八本 杉は、それから東 120 米位離れた台地である斐伊神社の飛び社域になっていた。この斐伊 神社に、スサノウ稲田姫が祀られている。この社名によって、ここを流れている出雲第一の 大河が現在「斐伊川」という。スサノウが出雲を治めた頃、出雲、隠岐の島を合わせて百八 十六部落分け、それぞれに族長を置き、神社を作らせた。

此の木次を治めたのが糸の尾羽張猛、その後が樋速比古尊で、この二人を待つ蔦神社があり、 それを「夜比古神社」といった。それが、このヤマタノオロチを倒したこの木次に、スサノ ウ、稲田姫の二人を祀った斐伊神社ができるに至って、そこを流れている出雲第一の簸の川 を神社名の斐伊川に改めて今日に至っている。それほど、昔この斐伊神社は、スサノウがヤ マタノオロチを倒して日本歴史の幕を開けた場所として、有名だったようである。延喜の時、 国幣小社になったことでも証明される。この事件のとき、スサノウは、稲田姫を奪って父の いる沼田の家には連れて行かなかった。多分ヤマタノオロチ一族の追い打ちを恐れたのであ ろう。松江駅から南に 4 キロの所に現在縁結びの神様と名乗っている「八重垣神社」があ る。現在はスサノウ、稲田姫も一緒に祀られているが、調べたらこの部落は「青播佐久佐比 古命」というここの神(部落長)を祀ったもので、昔は佐久佐神社といい、この地名は現在 でも「佐草」である。それなのに、どうして八重垣神社と名乗るようになったか、その関連 を調べたら、スサノウが稲田姫を奪いだしたとき、一時ここに姫を隠して置いたという、伝 説が有り。恐らく、この青播佐久佐比古という人が、父フツ(布都)と親族の間柄で、一時、 姫をここにかくまって、もらったのではないかと想像される。もちろん、ヤマタノオロチの 尾から、刀が出た、など出鱈目である。八重垣神社の本殿の後ろ 100 米ばかりの所に、奥の 院佐久の森がある。そこが稲田姫をかくまった所と伝わって、そこにあった大杉のところに 八重垣を作って、オロチ一族の襲撃に備えたという。

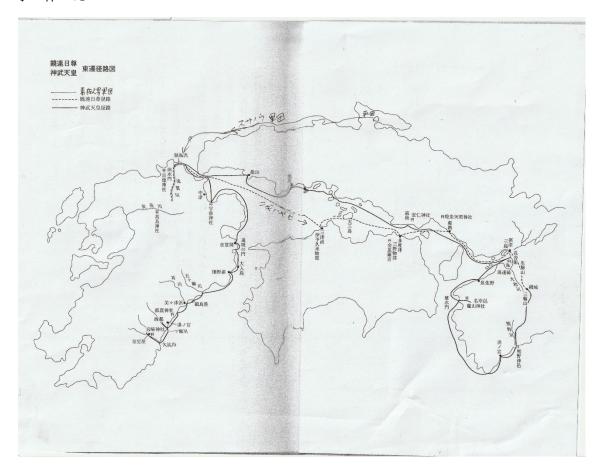
なぜ、この地を選らんのか。一つには、清田「西利太」の製鉄所に近いこと。また、その清田から、当時、でも要衝だったのであろう松江市に通じる途中であること。うしろの八雲山(三室山または須我山)に上ると、眼下に中海や宍道湖を見下ろし、島根半島から弓ヶ浜、遥かに出雲富士大山を望める、絶景の地であったこと。平野ではないから攻められたとき、途中で防ぐ場所があること。なので、ここを選らんだものと思われる。

この住居の前で、毎年八月に出雲中の物産交換の大市が開かれて賑やかだったと伝わって、 今でも地名が「市場」である。出雲中の物産交換市場が立って、夜通し賑わったとあり、これは、スサノオの死後も長く続いたようで。この様な事がスサノオに、大きな力を与える事に、なったのでは。

実際この後のスサノオの行動を、見て行くとまず、非常に勇猛で強かった。一生涯戦っても 敗れたという記録がない。非常に頭が良くて、出雲、隠岐を百八十六ヵ村に分けて、それぞ れに、村長を置き、自分の住んだ須賀から離れている西出雲には市庁をおいて、時々そちら に出張していた。隠岐の島の方は水若酢尊という人に支配させていた。隠岐の島は北鮮、北満ルートの重要な所であった。五百村大崎に旧国幣中社、水若酢神社として祀られている。また、家庭にあっては、八人の子が全部、稲田姫の生んだ子であり、その子達が皆な優秀で、その子孫が大辺、栄えたというので、弥栄神社に祀られ、それが八という数字に結びついて、いつの間にか、夫婦と八人の子供を祀る神社を八坂神社といい全国至る所に祀られている。九州遠征

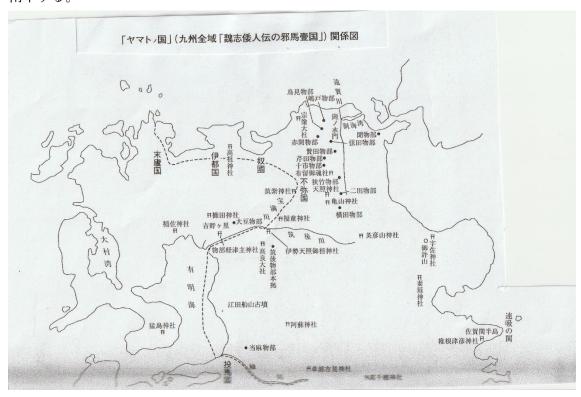
木次事件で鉄の鉱山と美女を手に、入れたことがきっかけで、たちまち評判になり、本人も自信をつけて、三十五歳頃には、出雲や近隣の山陰地方では、だんだん頭領と仰がれようになった。【九州ではこの頃(154年頃)卑弥呼】が、生まれている。

スサノオ四十歳頃には、船が発達していたので、北陸の越前、加賀、能登の辺まで遠征したり、西は今の山口県のほうまで遠征したようである、(陸路はほとんど無かったので、山陽地方には足跡がない)。そして懸案の九州遠征を決行したのは 173 頃のことでスサノオが五十歳を過ぎた頃と考えられる。それ以前にも、筑前や、豊前の小倉地方に何度か遠征したらしい事は、中国の後漢書「桓帝(167 まで)霊帝(168—189)の時、倭国(九州地方)乱れると記されている。しかし、本格的な九州遠征に乗り出したのは、173 年頃、第五子の大歳が二十歳を過ぎてからの、ようである。中国の梁書には「霊帝の光和(178—183)の時、倭国乱る」と記されている。当時の日本は、山陰の中海、宍道湖があるために、大陸の冒頓単于の作った



大蒙古帝国から北満、北鮮、隠岐島、出雲のルートで、西欧まで通じる文化、経済の窓口であった。また、日向の国(後の日向、大隅、薩摩)は鹿児島湾、山川港があるために、大陸の文化、これも西欧に通じていたと思われる文化、経済が、揚子江下流から通じて、日向はその窓口であった。それと同時に、出雲は寒冷地で時に冷害で食糧が欠乏する事があるが、九州地方、特に日向のほうは、温暖でよく米が採れた。また豊国(豊前、豊後)は盆地が多く、当時の穀倉地帯だったし、宮崎、佐土原、西都の地区も穀倉地だった。

色々な、条件が、スサノオの日向遠征の原因になったものと思われる、満洲、蒙古の方から、 高度の鉄の文化が入っていたから、スサノオ、大歳父子の騎馬部隊が、小倉から、博多の方 を占領するのはあまり時間が、かからなかった。もちろん陸路だけではなく、船も相当使用 したと思われるが、豊前、豊後の有力な盆地を占領するのは、やはり陸路を進んだと思う。 実際は豊後水道の佐賀関の海峡が、海流が速く、暗礁があって船便が危険だったので、今の 大分市の所へ上陸して、それから南は陸路を使った。魏志倭人伝の「陸行一月」も、このコ ースを指している。この進行作戦の時、若い大歳の率いる騎馬部隊の強さは非常に評判だっ たようで、各地ともむしろ憧れの目で迎えられたようである。現在でも、豊前、豊後、の地 方の町や村の氏神様には、スサノオの八坂神社に混じって大歳神社がかなり多く存在してい る。北九州をあっという間に、占領したスサノオは、大歳の大活躍ぶりに、満足したのか大 歳に、饒速日と名命して、北九州を任せて、本隊は卑弥呼の統治する、日向の国に向って、 南下する。



当時、卑弥呼の住んでいた現在の宮崎市に、達したのは 177 年頃で、スサノオ五十五、六歳、卑弥呼二十四歳ぐらいの時である。威風堂々、騎馬部隊の先頭に立って乗り込んできたスサノオの勇姿に、驚きの目で魅せられたようである、その時卑弥呼は進んで、スサノオの軍を受け入れ、戦う事は、無かったようである。その後、スサノオが九州統治している間、現地妻のような形で、スサノオとの間に、三人の女子を産んでいる。スサノウが敢て九州進攻をしたのも、もっと温暖で、もっと米の穫れる土地が欲しかったからで、ここを占領したスサノオは、九州統治の都つくりに何年間か、ほとんど日向で暮らしたようである。

そういう地理的環境を考えて、やはりこの西都の地を選んだものと思われる。このスサノウの置いた日向政庁は、とりもなおさず、九州全土の都である。そして、ここは素佐之男時代約十年、大国主時代約三十年、大日霊女女王時代約三十年、豊受姫王時代約五十年、と四代凡そ百二十年に渡って、九州全土の都であった。

現在、西都原を中心として、付近の部落を併せて、実に千数百個の古墳が密集している事で も、当時の邪馬台国、西都の隆盛がしのばれる。スサノウがこの西都に都をおいた時から、 ヒミコはここに、同居して、終生ここで暮らしている。【大国主は、出雲を出発した時は、 まだ大巳貴で、この地、大きな国を統治したことにより大国主と、呼ばれるようになった】 スサノウがこの西都に都を置いた時から、ヒミコはここに同居して、終生ここで暮らしてい る。当時、大和を制する者は日本を制すと考えられていたので、日本一の大盆地、つまり日 本一、米のとれる大和平野のことは、スサノオもよく知っていたようで、この方は、一番信 頼していた大歳(饒速日)に任せて、自分は次男の五十猛を相手に、朝鮮半島から満洲の方 へ遠征を考えていたようで、その調査に、五十猛を派遣した。その夢を実行に移す準備を進 めていた途中の185年頃、スサノオは六十三歳か四歳ぐらいで、亡くなっている。せめて、 もう五年も長生きをしたら、多分半島へ遠征していたであろうにと惜しまれる。その前に、 九州平定が終わると、大歳を大和に送っている。182 年頃で三十歳ぐらい、ニギハヤヒと、 改名されて大和へ送るについて、大和の王位継承のしるしとして、「十種神宝」を授かって いる。スサノオはニギハヤヒを大和に送ってから、三年~四年ぐらいで、出雲で亡くなって いる。 亡くなった場所は、 松江駅より南十三キロの八束郡大雲村熊野の地、 即ち住居のあっ た、八雲山(三室山)の反対側の麓、意宇川のほとりである。その前の熊野山に「磐座」の 形で、葬られている。この磐座は、大和の大神神社の本殿となっている、三輪山(饒速日の 陵)と共に、日本でも珍しい形式である。おくり名を「神祖熊野大神奇御食野尊」と言う。 八坂神社(出雲では弥栄神社)は祇園社ともいう。その他、「牛頭天王」「天王さん」等は、 みんなスサノオを祀ったもの、「進雄尊」と当て字したものもある。東日本には、埼玉県大 宮市の旧官幣大社「氷川神社」(出雲では簸川神社)をはじめ、「氷川神社」の名で素佐之男 を祀った神社が多い。それにしても、素佐之男、稲田姫の二人から生まれた八人の子、その 孫など、一族を祀った神社は、古事記、日本書紀が出る以前に、全国至る所に、存在してい た神社全体の七割ぐらいも占めていた。まことに弥栄と言うほかはない。

ここまで、スサノオの足跡を追跡してきましたが、次は、ヒミコです。

これは、論文として、書いたものでは、ありません、私の神社まわりの、体験で、得た知識 が、一致する作家の方で「記紀以前の資料による、古代日本正史」の著書、原田常治さんの 書かれた、本の内容を、ピックアップしたものです。私がこれまで、訪ねた神社の宮司さん から、頂いた、系図が手元に、ありますが、重なる部分が、多々あるので、今後も継続した いと、思っています。

役員の方々に、読んで頂き、感想のほどよろしくお願いいたします。

ID-10389 黒岩伸一

一四七年頃 一下昭二六八〇年頃 下昭二六八〇年頃 下昭		型) 年	- 二五五年頃 - 二五五年頃 - 二五五年頃 - 二五五年頃 - 二五五年頃 - 二五五年頃 - 二九五年頃 - 二九五年頃 - 八九五年頃 - 八九五年旬 - 八九五日 - 八九五日日 - 八九五日 - 八九五日 - 八五日 - 八五日 - 八五日日 - 八五日日 - 八五日日 - 八五日
連合国「ヤマト・国」(九州)、大和朝・廷に併合。「ヤマト・国」の女王壹与、使者を中国西晋に遣わす。「ヤマト・国」の女王壹与、使者を中国西晋に遣わす。宗女壹与(豊受皇大神)が女王となって国中平穏となる。 アリー・ (高木神か)が立つが国中服さず。天照大神亡くなられる。	神武天皇、奈良県橿原宮で即位。 神武天皇、奈良県橿原宮で即位。 神武天皇、奈良県橿原宮で即位。 神武天皇、奈良県橿原宮で即位。 神武天皇、奈良県橿原宮で即位。 が起こり、魏国に救援を求める。魏国支援により停戒合意。 が起こり、魏国に救援を求める。魏国支援により停戒合意。 変国、 大田大神)との間に確執 が起こり、独国に救援を求める。魏国支援により停戒合意。 変国、 大田大神)との間に確執 がおこり、独国に救援を求める。魏国支援により停戒合意。 変国をもって告論し、狗奴国との戦争は和睦により治まる。	新(軍団)その他を従えて大和(奈良県)に東遷する。 部(軍団)その他を従えて大和(奈良県)の豪族長髄彦を服従させ、その妹三炊屋姫を妃とし、字摩志麻饒速日尊、大和(奈良県)の豪族長髄彦を服従させ、その妹三炊屋姫を妃とし、字摩志麻饒速日尊亡くなられる。奈良県桜井市三輪山山頂を御神陵とする。 神武天皇、毎平津姫と結婚、手研耳。命誕生。神武天皇、日向より大和に東遷発駕。 神武天皇、日向より大和に東遷発駕。	現佐之男尊、八岐大蛇(産鉄族首領)退治。 須佐之男尊、八岐大蛇(産鉄族首領)退治。 須佐之男尊、八岐大蛇(産鉄族首領)退治。 須佐之男尊、祖田姫と結婚。 大歳尊(饒速日尊)誕生。父・須佐之男尊、母・大市姫。 大歳尊(饒速日尊)誕生。父・須佐之男尊、母・大市姫。 須佐之男尊、祖芸を統一し出雲国を創建する。 須佐之男尊、出雲を統一し出雲国を創建する。 の三女神誕生。 姫(湍津姫)、狭依姫(市杵島姫)の三女神誕生。 姫(湍津姫)、狭依姫(市杵島姫)の三女神誕生。 佐と男尊、出雲に帰る。時に効い天穂日命に祖母・伊邪那美尊を連れていく。 日向国統治は大日霊女貴尊(天照大神)に任せる。 日向国統治は大日霊女貴尊(天照大神)に任せる。 日の国統治は大日霊女貴尊(天照大神)に任せる。